

# 太宰の足跡をたどる①

## 太宰治記念館「斜陽館」

(だいたいおさむきねかん 「しゃようかん」)

太宰治の生家津島家は、この地域の大地主で、父源石衛門は、先代から続く貸金業のほか、金木銀行や金木電燈などを経営する企業家でもあり、また貴族院議員を務めた政治家でもありました。明治40年、金融業店舗を兼ねた和洋折衷・入母屋造りの豪邸が完成し、その二年後に津島修治が生まれます。太宰はこの家を「苦惱の年



支配人 今 幸樹さん

鑑」で、「この父は、ひどく大きい家を建てた。風情も何もない、ただ大きいのである。」と書いています。津島家が屋敷を手放した後、昭和25年からは旅館「斜陽館」として使用されていましたが、修復復元工事を行い、平成10年から太宰治記念館となっていました。また、平成16年12月10日、国の重要文化財に指定されました。



▲玄関に入ってすぐ、母屋を貫く「通り土間」が印象的。



▲文庫蔵や米蔵では、太宰治と津島家のゆかりの品々や直筆原稿などが展示されています。

ここでは、太宰幼少の頃の名残を遺す貴重な場所です。この家で生まれ育ち遊び、家の商売、立場を感じ、同じ兄弟の間にもある身分の差、親代わりだった叔母きさ、子守のタケとの別れを経験し成長していきます。太宰治という人間、そして時代背景を知る上で、重要な手がかりとなるはずです。

見学の際は、館内スタッフの案内で巡れば、より理解を深めることができます。また、金木地域を観光するのに便利な資料の配付や体験メニューの受付も行っているため、こちらも気軽にお問い合わせください。

## 太宰治疎開の家「旧津島家新座敷」

(だいたいおさむきねかん 「きゆうしんざしき」)

「新座敷」は、大正11(1922)年、太宰14歳の時、津島家の跡取りとなる太宰の長兄、文治氏の結婚を機に新築されたものです。当初は、母屋現「斜陽館」の奥に隣接する形で建てられましたが、現在は、生家斜陽館から東に約90m離れた所にあります。これは、戦後、地主制度が崩壊し、県知事となった文治氏が、昭和23年6月(太宰が亡くなった同月)、母屋現斜陽館を手

放した際に、「新座敷」だけを現在地まで移設して家族の住居としたからです。長い間生家から義絶されながら作家活動をしていた太宰は昭和17年、33歳の時、床に伏した母に会うために帰郷し、この屋敷で涙をこらえた。ピノードを「故郷」に書いています。そして終戦直前の昭和20年7月末、太宰は家族とともに故郷に疎開、ここで終戦を迎えます。

開、ここで終戦を迎えます。



▲重篤の母親と再会した和室では、エピソードを聞いて涙する見学者も多いそうぞうです。



▲見事な庭園には、太宰も食べたという柿の木が残っています。



現所有者で見学者に屋敷内をガイドしている案内人 白川 公視さん

太宰は、昭和21年11月までの1年4ヶ月の間この家で暮らし、「バンドラの匣」「薄明」「たずねびと」「十五年間」「嘘」「冬の花火」「春の枯葉」「親友交歓」「トカントン」「貨幣」「苦惱の年鑑」「庭」「母」「やんぬる哉」など二十数作品を執筆しました。疎開前に書かれた「帰去来」や「故郷」などを含め、この新座敷を舞台に描かれた文章にふれながら見学すれば、また違った太宰の側面を知ることができます。側面に登場するエピソードなども紹介しながら、各部屋をご案内しています。

作家としての太宰が実際に暮らし、生活の息づかいも感じてもらえればと思っています。

## 雲祥寺

(うんしょうじ)



住職 一戸 彰晃さん

「地獄絵に恐れ、弱者に寄り添うやさしさを芽生えさせて泣き出した幼い太宰は、その頃すでに繊細な感性と、弱者に寄り添うやさしさを芽生えさせていたと思います。そんな、太宰文学の原点がここにあるんじゃないでしょうか」と、二戸住職は本堂の十王曼荼羅を紹介。さらに、「太宰が記念講演を行ったこともある地元有志の文化活動「金木文化会」が、生誕百年を機に、ここ雲祥寺で復活しました。かつて太宰が地元の若者たちと文学を通して交友を深めたように、ここが太宰文学の理解を深める拠点になればと思っています」と語ってくれました。



▲七幅に及ぶ、細密かつ迫力ある描写の「十王曼荼羅」。さらにその奥には、貴重な良寛の書も鑑賞することができます。



▲生誕百年を記念して建立した記念碑。碑文は太宰直筆で、小説「津軽」の「汝を愛し、汝を憎む」を引用。

## 南臺寺

(なんだいじ)



住職 生玉 充さん

児童のために日曜学校を開き、本の貸し出しを行っていた南臺寺。本堂内には当時の住職とたくさんの子どもたち、そして後に同窓会を開いた時の集合写真が飾られています。住職の生玉さんは短編「思ひ出」の一節にふれながら、「ここは津島家代々の菩提寺であるとともに、太宰が日曜学校の蔵書で文学に出会った場所でもあります。地域の子どもたちが集ったコミュニティの場として、そして津島家のゆかり深い場所として、見学してもらえたらと思います」と語ってくれました。



▲子どもたちの書画をまとめた冊子を展示。表紙のいたずら書きや拙い文字が、ほほえましく感じさせます。



▲鐘樓に掲げられた額には、「大正十四年三月四日 津島文治氏寄贈」とあります。